

解けない私の仕事と私事の絡み合い構造



酒井崇匡

東京大学大学院工学系研究科化学生命工学専攻
[113-8696] 東京都文京区本郷7-3-1
教授, 博士(工学).
専門はゲル, バイオマテリアル.
sakai@gel.t.u-tokyo.ac.jp
https://gel.tokyo

「酒井くん、アカデミアの成功なんてものは、バーチャルなものだからね。本当に大事なものは、家庭だよ。」プロの研究者としての生活を始めた年に、恩師である鄭雄一先生にいただいた言葉である。この言葉には、非常に感銘を受けたし、今でも大事にしている。そうなのだ。家族からすると、私のアカデミアの成功なんてある意味どうでもよく、毎日ちゃんと仕事に行き、それなりの時間には帰ってきて、出張は少ないのがベストなのである。私も、もちろん奥様にも働いていただいて、一緒に家事をし、子育てをし、そして楽しく過ごす、それが理想であった。しかし、現在、そのような状況にはない。私は好きなように研究に励み、さらにはベンチャーを立ち上げ、そして子どもと遊ぶという美味しいところ取りした上で、家事のいっさいを妻に委ねている。このような状況になった顛末と、思うことについて、ここに記したい。

実は、最初はそうではなかった。長女が生まれた当時、私は間違いなく家庭第一であった。妊婦検診にはほぼすべて同席し、出産時はカンガルーケアを行い、出産後は入院する妻と娘の元へ日参し、家に戻ってからは、可能な限り常に娘を抱き続けた。娘には、なんとか早く「パパ」と呼ばせようと一生懸命にパパを教え込み、母乳からミルクに切り替えようと頑張り(結果失敗)、オムツを替え、離乳食を与えた。さらには、娘が保育園に入ってから、お見送り、お迎え、時々ご飯を作ったりもした。さらには、ミシンで娘のバッグや洋服、ぬいぐるみを作ったり、お菓子を作ったり、娘の日常を日記にしたりした。改めて列挙していると、自分がやりたいことをやっていただけで、「これで家事やっていたなんて言うなよ」とお叱りを受けそうな気もするが、少なくとも妻からは評価されていた(2023.8.31本人確認済)。この当時は、たぶん、5時から6時にはラボを出て家に帰っていたのではないだろうか。

その状況は長男の誕生により一変した。長男は、早期胎盤剥離による低酸素状態で生まれ、出生後長期の入院を余儀なくされた。また、後に、遺伝子疾患をもつこともわかった。息子は、9歳になる今でも、立つことはおろか座ることもできず、会話はおろか感情を読み取ることも難しい。首には呼吸のための穴が、お

腹には食事のための穴が空いており、常時酸素を送り込み、一日4回栄養を注入しなければならない。小学校の送り迎えはもちろん、体調が悪くなったら迎えに行かないといけない。この状況に至れば、いっさいの綺麗事は通用しない。私たち家族は、息子を看護せねばならず、息子の一生の面倒をみななければならないのである。私たちは、私が「仕事」を、妻が「介護と家事」を担当することを選択した。私たちにとっては、これが最適解であった。この記事を読んでいる方は、「随分と重たい話を……」と思われるかもしれないが、酒井家一同、間違いなく楽しくやっていることはお伝えしておきたい。日頃の私のチャランポランぶりをみている方には、よくご理解いただけると思う。しかし、この記事を読んだ方に、「酒井に無体なことをするのはやめよう」と思っていただけなのであれば、それはそれで幸いである。

最後にいくつか思うことを述べたい。最近では、社会も優しくなり、さまざまな支援が受けられるようになった。しかし、配偶者が働いていないと受給できない場合が散見される。「配偶者が働いていないのはなぜなのか？」をもう一度考えていただけないだろうか。私の妻は、サボっているわけでは断じてない。働きたいのに働けない状況に陥っているだけなのだ。そして、それは、家庭を守るためには致し方ないのである。一事が万事、このような事象は多く存在するのではないかと想像する。

意思疎通のできない息子についてあれこれ考えることは、哲学である。彼の幸せのためには、少なくとも私たちは彼のせいで不幸になってはいけない。彼は、私を変えたように思う。私は、昔よりも楽観的になったし、こだわらなくなったし、優しくなった。そして、彼の分まで働くことを決めたことで、野心的になった。私の私事と仕事は大いに影響し合い、ぐちゃぐちゃに絡み合った、複雑な構造をしている。どこのゲルのように理想的でわかりやすい構造をしていたら、果たしてどうなっていただろうか?と、なんとなく、うまいことを言った感じを出したところで、本稿の結びとしたい。